



図1 シャルツァフの恐竜の足跡化石観察地.

私は、恐竜化石の展示をしていた東海大学自然史博物館に勤めていた関係から、1989年と1994年にモンゴルに行き、1994年には恐竜化石産地も含めてゴビの地質を巡る旅を行い、ゴビの自然や地質にたいへん興味をもちました。その経験は私の本『モンゴル・ゴビに恐竜化石を求めて』に書かれています。その後も、私は私的に1995年～2002年までほぼ毎年ゴビを訪れ、化石産地などを巡ってきました。2002年以降はモンゴルを訪れることができませんでしたが、一昨年の2023年7月に20年ぶりにゴビを訪れました。ここでは、この旅で訪れた恐竜化石産地やゴビの自然と、私が驚ろかされた20年前と今日のモンゴル社会の変化を簡単にお伝えします。



図2 シャルツァフの恐竜の足跡化石.

シャルツァフの恐竜足跡化石 シャルツァフの恐竜足跡化石は、1995年にモンゴルと日本の合同調査隊が発見し、総計18,000もの足跡化石が発掘されました。2008年にはこの恐竜足跡化石サイトと足跡化石がモンゴルの天然記念物に指定され、この地区の408 haが保護地区とされ（図1, 2）、2015年には他のゴビの恐竜産地とともにユネスコの世界遺産に登録されました。

南ゴビの自然と歴史の博物館 南ゴビ県の県都であるグランザドカドは、1994年に私がこの町を訪れた時には2つの小さなホテルのほかに草原の飛行場しかなかったところでしたが、今やたくさんのホテルを含む高層ビル群が立ち並び、たくさんの人々と車が行きかう都市に大変身していました。2022年5月にはGobi Museum of Natural and Historyという博物館（図3）ができ、この博物館は外見も立派で内部の展示も美しくしっかりしていて、入口を入るとそこから見下ろせる明るい地下1階の恐竜ホールにはタルボサウルスの全身骨格標本があり、そこでは学芸員による来館者グループへのガイドツアー（図4）が行われていました。

バヤンザクとネメグト盆地 バヤンザクは、1923年にアンドリュース率いるアメリカ自然史博物館の調査隊が恐竜の卵化石などを発見したところです。ここは私がゴビに行った時にいつも調査をしたところでしたが、今は車での立ち入りが制限され保護地区となっていて、入口にあたるビジターセンターを通過して観察路（図5）を歩いて見学できるようになっていました。ここには、多くの観光客が来て見学していました。一方、タルボサウルスやサウロロフスの化石がたくさん発見されているネメグト盆地（図6）は、



図 3 南ゴビの自然と歴史の博物館.



図 4 博物館のタルボサウルスと学芸員のガイド.



図 5 バヤンザクの崖の上の観察路.



図 6 ネメグト盆地でモンゴル隊のキャンプ地を確認.



図 7 1994 年 9 月のウランバートル市街.



図 8 2023 年 7 月のウランバートル市街.

バヤンザクから 250 km も西にあり、荒涼とした大地がどこまでも続くようなところで、ここではまったく人と遭遇しませんでした。

ウランバートルとゴビの遊牧民の生活の変化 ウランバートル市街はこの 20 年でほぼ 3 倍の広がりになり、人口は約 140 万人と 2 倍以上になり、モンゴルの人口のほぼ半数がこの都市に集中していました。その変化は私にとっては想像以上で、図 7 と図 8 でその変化を示します。また、ゴビの遊牧民の生活も大きく変化し、現在の遊牧民の生活必需品はトラックや乗用車、オートバイにソーラパネル付きのトレーラーハウス、プロパンガスコンロ、WIFI とスマホで、かつての乾燥牛糞を燃料に馬の乳を加工した乳製品を食材や飲料としていた自然の生活はあまりみられませんでした。南ゴビではここ数年続いた干ばつの影響もあり、遊牧民の減少と孤立が進んでいました。モンゴルは遊牧の生活を国家の生活基盤としていますが、今後も自分たち自身を見失わずにモンゴル民族の国を発展させていってほしいと思います。